


## 沖縄国際大学 平成 26 年度 FD 支援プログラム成果報告書

下記内容により、FD 支援プログラムの取り組みが完了いたしましたので、「FD 支援プログラム成果報告書」にて、ご報告いたします。

報告者氏名	兼本 敏 	所属・職名	総合文化学部・教授
プログラム名称	中国語音声教材の蓄積と配信		
実施及び成果の 要旨	<p>{現状}</p> <p>本学の共通教育として提供されている「中国語Ⅰ・Ⅱ」は 11 クラス有り、複数の教員が各自異なる教材を用いて講義にあたっている。11 のクラス分けの条件は学生の所属学部学科と学年次（主として 1 年次を指定）を基準としている。これは学科に関連する中国語の語彙、多用される文型が異なり、それぞれの学科に適した講義内容と集中した練習量となるためである。その為、クラスによって習得すべき語彙、文法事項が統一されていないという現状がある。</p> <p>このような現状において成績評価の一貫性、公平性を維持する目的で「習得度テスト」を作成し実施している。「習得度テスト」は共通教育での中国語の履修項目の最低限習得すべき事項を確認するもので、その結果は担当教員および学生に通知されている。この成績結果は、所謂「不可」のボーダーラインを示唆するだけのもので、成績の最終評価でもなければ、「可」を保証するものでもない。</p> <p>「習得度テスト」の実施に伴い、学生から「出題傾向、文型、語彙」などの事前提示を求める声が強くなっていった。これまでは講義内で学習した最低限度の基礎項目も確認であるとの説明で終始しており、担当教員も習得度テストの内容および難易度に納得していた。しかし、聞き取りに関してはリスニングの練習頻度に大きく左右されることから自学習できる副教材の提供が必要だとの意見もあった。</p> <p>その要求に対応する目的で、ウェブ上で利用できる「中国語の語彙、文型の音声教材」の作成を試みた。</p> <p>{教材の実態}</p> <p>担当教員が使用している各教科書に採択されている共通語彙を中心に単語リストを作成し、中国語の漢字表記に音声を付けた。またピンイン表記のみに音声を付けたリスト、および基本文型の習得を目的とした三段階の難易度に分けた問題を学内ラボ室に作成した。</p> <p>語彙リストは暫定的に民間の無料サイトを利用して学外からもアクセスできるようにした。</p> <p>{成果}</p> <p>学生の利用度は個人差が激しかった。語彙リストはかなりアクセスがあったが最終的に音声は移動や破壊あるいは削除されていた。</p>		
実施期間	自： 26 年 4 月 1 日 至： 27 年 2 月 12 日		

※共同実施者（2 人以上の場合は、別紙添付のこと）

申請者氏名	印	所属・職名	
申請者氏名	印	所属・職名	

目的	<p>中国語音声教材の蓄積と配信 —中国語の統一テスト（習得度テスト）に含まれる語彙および文型の自学習による習得補助教材の提供—</p>
活動内容	<ol style="list-style-type: none"> <li>1. 平成 23 年から実施してきた「習熟度テスト」の結果を参考に統一した『習得度テスト』を作成し、平成 24 年度から最低評価「不可」の基準として実施した。</li> <li>2. 『習得度テスト』の準備として、各教員が採用している教科書から重要語彙を採取しプレテスト（事前学習）、結果によっては再試を実施した。</li> <li>3. 11 クラスの成績評価の最低のレベル基準として設け、担当教員および受講生への周知を行い、成績評価の透明性を高めた。</li> <li>4. 音声作成のための収録（留学生による録音および加工：mp3 wav の作成）</li> <li>5. 語彙のウェブ上での公開のため Google Drive へのアップロード。</li> <li>6. 利用度の調査と確認</li> <li>7. 教材の修正</li> <li>8. 「習得度テスト」の追試を実施した。</li> <li>9. テストの実施後の学生の反応やテスト内容の改善のための話し合いを担当教員と話し合った。</li> </ol>
成果・結果・効果	<p>アクセス数から利用状況を判断するとかなりの利用者がいたと言えるが、効果が有ったとは断言できない。</p> <p>ラボ室からの利用に関しては統計が取れているので、効果や成果に関してはある程度の結果を見ることができた。統計が示すように、個人差がかなりあるがラボ室利用の自学習による利用頻度に応じて成績が上がっている。</p> <p>学外からアクセス可能な語彙音声リストの利用に関しては作成者（兼本）の技術的未熟さとフォローアップの頻度の低さで、教材が削除、移動、破壊の発見が遅れ対応ができなかった。しかし、学生へのヒヤリングでは初期段階で既にダウンロードした人数も少なくなかった。懸念していたスマートフォンの機種の違いで不具合に関しては多くの学生が音声教材を独自に再変換していた。利用に支障を来した学生には補助が必要であることがわかった。音声形式の変換への対応には問題ないと言えるが文字化けに関しては確認すべき事項である。</p> <p>スマートフォンの利用に関してはラボ教室以外での講義時間での利用が目立ち、担当教員から問題提議があった。</p> <p>結論としては、教室外での自学習者はあまり多くはなく、学内での学習は割合多いことが判明した。自学習できる環境整備としては効果があったと言える。</p> <p>※添付 CD 参照：受講者のサンプル、語彙リスト、文型問題など</p>
今後の展望	<p>先ず、学外からのアクセスに対応できるサイトおよび教材の確保を考慮する必要がある。今年度の結果から言えば、学内のみ限定しても良いことになるが、ラボ室の利用が他の講義との関係で限定的である本学の環境を改善する意味で、利用者実数での結論ではなく、自学習の機会と可能性を広げる立場で今後も継続的に音声教材を提供すべきであると言える。</p> <p>今後は作成者（兼本）自身の技術的問題であるが、音声教材のウェブ上の提供に関してはサイト内での安定（固定）したアップロードを可能にするよう技術の向上を心がけたい。</p> <p>音声教材の場合、その著作権問題も考慮しなければならず、留学生や中国人講師の録音への協力も考慮に入れ本学独自の音声教材の作成を試みる必要がある。</p> <p>また、自学習の効果を測定する何らかの方策を各担当教員と話し合っていく予定である。</p>